

人を何よりも大切にする文化

蓮見 孝

長くて覚えにくいのですが、この事業は、「小美玉市まるごと文化ホール計画策定プロジェクト」といいます。平成22年11月18日の第1回から今年の9月8日までの2年間にわたり、市内3館のホールを支えてきた住民リーダー12名と職員7名が参加して、活発な議論や研修が、夜な夜な熱心に繰り広げられました。

そもそも“まるごと文化ホール計画”とは何なのでしょう。インターネットで検索してみると、“市内にある3つの公共ホールが、文化の創造・育成を図る地域住民の拠点として機能し、それぞれの特性を活かしつつ連携するための指針となる全体計画の草案をつくる”と記されています。わたしは、そのアドバイザーとして参加することになったのですが、いずれのメンバーも文化の担い手として活発かつ着実に文化活動を推進されてきた方々でしたので、“わからんチン”は一人もいず、ゴールめざして最良のチームワークでサクサクと指標づくりに邁進することができ、とても印象的なプロジェクトとなりました。メンバーのみなさん、そして名仕切り役の中本正樹さん、本当にありがとうございました。

結果として、文化の本質に迫る有意義な成果が得られたと思います。文化とは、あらゆる人をその人らしく生きさせてくれる表現の泉であり、幸せの源泉なのです。だからこそ、文化は人を何よりも大切にします。文化ホールは、人を育て、人に生きがいを与えてくれます。ホールで生きがいを育てた人は、やがてまちの隅々に、魅力的な文化活動の花を咲かせ、それが町中に広がって、市内がまるごと文化ホールになっていくことでしょう。いくら立派なホールがあっても、切り花のような興業活動に頼るだけでは、すぐに文化の花はやせ細ってしまうはず。「住民参画」という根のある活動が引き継がれていくからこそ、文化の木は大きく枝葉を広げ、ますます見事な花を咲かせるのです。「根を張ってこそ花が咲く」という山口茂徳館長の名言を忘れないようにしたいものです。今回のプロジェクトには、さまざまな方々にゲストとして来ていただき、意義ある情報交換や議論をすることができました。喜多方プラザ元館長の薄崇雄さん、TAP事務局長の羽原康恵さん、茨城県生活文化課の武田順さん、市空港対策課の高田勝利さん、東京芸大音楽学部教授の熊倉純子さん、群馬交響楽団の五十嵐靖夫さん、栗田弘之さんです。みなさんの活動の様子や文化に寄せる思い、アドバイスを通して、小美玉市の文化ホールのあり方を多様な角度から比較して見ることができ、より客観的に自分たちのあるべき姿をとらえることができたと思います。遠路を厭わずやってきてくれた文化の友に、心から感謝いたします。

「桃杏不言 下自成蹊」という司馬遷の名言があります。桃やアンズは何も言わないけれど、その美しさに惹かれて人びとが訪れ、その木の下には自然に道ができる、という意味です。今回のプロジェクトを透して、メンバーのみなさんが、しっかりと根を張った桃やアンズの木に見えてきました。まるごと文化ホールは、きっとこれからも多くの文化の友だちを惹き寄せ、文化の道を大きく広げていくことでしょう。

小美玉市には、小川文化センター（アピオス）、四季文化館（みの～れ）、生涯学習センター（コスモス）の3館の公共ホールがあります。人口が約53,000人の小美玉市に公共ホールが3館あるという文化的に恵まれた環境です。合併以前の3町村がそれぞれに公共ホールを所持していたことによるものですが、3町村の住民がそれぞれに文化意識の高い人たちであったためであると思われる。この恵まれた財産を有効に活用して「まちじゅうに文化があふれる」ようにしたい、そして「文化のまち小美玉市のイメージが全国に知られる」ようにしたいと考えます。

第二次世界大戦後の日本は、産業経済が急速に成長しました。「心のやすらぎ」を忘れて「物の豊かさ」を求めて邁進しました。それなりに「まちが元気」になりましたが、「真の元気」ではなかったように思われます。文化に親しむことによって私達の「心にやすらぎ」が生まれます。また、世代を超えたつながりも生まれます。そして「創造力が豊か」になって産業経済が活性化し「まちが元気」になっていきます。「物の豊かさ」と「心のやすらぎ」の両方がある、初めて真に「まちが元気」になるのではないのでしょうか。

四季文化館（みの～れ）で始まった「住民参加・参画、行政支援による公共ホールの運営」が、またたく間に小川文化センター（アピオス）にも生涯学習センター（コスモス）にも根付き、活発に活動を続けています。文化の力を使って「まちを元気」にするためには、この活動をさらに活性化することが必要であり、この活動が世代を超えて継続できる仕組みづくりを行うことが必要であると考えます。3館の個性を活かしながら、ある時は融合し、またある時は競い合い、3館を文化発信の拠点として活用して「文化のまち小美玉市」を構築していくためには、どうしたら良いか？ 3館で活躍する住民リーダー12名に、コーディネータとして筑波大学大学院教授の蓮見孝先生をお迎えし「小美玉市まるごと文化ホール計画」を纏めました。

蛇足ですが10年後の私の未来日記「こんな小美玉市であってほしい」をご紹介します。
『昨日から始まったホールツアーに今日も参加した。小美玉市にある3つの文化ホールに音楽、演劇そして絵画のプロ達が今年も代表作品を持ち込んで競い合っている。本日はみの～れで音楽家の自作自演、即興演奏があった。いつからこんなにプロ達が集合するようになったのだろうか。どうして集合するようになったのだろうか。きっと小美玉市民一人ひとりが芸術を愛し、みんなで文化を育てる気持ちを持っていたからだろう。そして、その想いが世代を超えて若者へと受け継がれて来たからだろう。』

黒田 惇彦

「どうせ私たちには関係ない、一部の人たちが楽しんでやってるんじゃない...」

と思っている人を、「文化ホールの活動に参加してみようかしら」と変化させるかが一番の課題だと思います。

それには地道な声かけが有効ではないかと最近感じています。ボランティアスタッフに参加しませんか？と職場の人に声をかけ、「慣れないもぎりでしたが楽しかったです」との声を聞くと、こちらも嬉しくなります。職場以外での付き合いが出来るきっかけでもあります。催し物に参加している喜び、協力して成功させた充実感を共有することが次の声かけにつながるのではないかと思います。お祭りも見ているより参加している方が楽しいですから、企画する方はもっと楽しいでしょう。とにかく文化ホールに足を運んでもらうことです。

足を運んでもらうためには、幅広い年齢層の人に向けた催し物を仕掛けていく事です。幸運にも私どもの保育園児は1歳児からアピオスのステージに立っています。歌ったり、演技をしたり、実に堂々と発表します。自分を見てもらう喜び、スポットライトをあびた興奮を経験しています。父兄も同様です、ステージに立つ自分の子どもにカメラ、ビデオを向け晴れ舞台に満足しています。文化ホールのステージが近くに感じていることがよく分かります。

小学生、中学生に成長していく子どもたちが、ステージに立ち自分を表現できるチャンス、生演奏のオーケストラのステージを聴く体験、アクティビティの出前授業による邦楽体験。このような本物の芸術に触れる機会を提供すること、すなわち情操教育をするための投資は、未来への希望につながります。これからも惜しまず継続していかなければなりません。

このような豊かな経験をした子どもたちが、成人して次世代の担い手として活躍することが理想です。若いエネルギーを存分に使えるような文化ホールにしていけたら、と日々考えています。

練習、発表の場所として使いやすく、若者たちが集う場所づくりのホールにしていけたらよいと考えています。具体的な案は、これからみんなで考えていきたいです。

与えられた喜びより、与える喜びのほうが大きいと感じられますように。

本田仁子

23年度 小美玉市まるごと文化ホール計画も5回の会議が終わり、残すところ1回となりました
今年度の会議では、武田順さん、高田勝則さん、熊倉順子さん、五十嵐靖男さん栗田弘之さん、の6名のゲストを向かえ、それぞれの皆さんの経験豊富な話や熱い想いを聞き感銘を受け、帰りの車の中で、家でメモ書きを読み返しながら知恵熱が出ちゃいそうなくらい色々な事を考えました。
毎回話しを聞いた時にキーワードが増え、なかなか考えをまとめる事が出来ず非常にもやもやした気持ちです。

でも、今回の経験を通じ、今までなんとなくぼやっと考えていた小美玉市の将来像を真剣に具体的に考えるきっかけになりました

毎回の会議で自分が感じたキーワードをあげると

- ・ 単にホールをどう運営するかだけでなく、文化の視点でまちをどう考えていくか
- ・ 新たな人のつながり、広がりはどう作っていくか
- ・ 茨城空港や空の駅（構想中）も文化発祥の地と考え、小美玉市は文化ホールが5館ある
- ・ 文化・芸術は金が掛かるものだが、文化・芸術でお金を稼ぐ事も考えてみる
- ・ 大切なのはイベントをやることでなく拠点をつくることだ
- ・ 自分たちだけでやると燃え尽きていくが、外から燃料をもらって燃え続けることが大事なのかも。
- ・ もっともっと様々なものをウエルカムしてどんどん多様化していく
- ・ ホールという舞台を使って思い出をつくって次の人たちにバトンタッチしていく、「ピオトープ」がいいんだと思っている
- ・ 時間と空間の共有
- ・ もってきた文化は育たない

色々キーワードはありますが、一番つよく思う事は

今回の経験やおもいを限られた人数だけにとどめるのではなく、もっと多くの人と共有しなくてはいけないと思います。

3館の委員、ボランティアスタッフ、そして館を利用している団体の方達、なるべく多くの人と同じ目標「芸術・文化で元気に生きる」を共有し、同じ目標に向かって歩けるよう、まるごと文化ホール計画のこの会議（勉強会）を今年度で終わりにするのではなく、毎年新しく受講生を集め、3館の合同事業として続けていってほしいと強く願います。

レポートを書いた経験が少なく、感想文にもなっていないまとまりの無い文章になってしまいましたが、私のレポートとさせていただきます。

石川 弥来

1 自主的なまちづくり活動の推進に向けて

まるごと文化ホールプロジェクトチームに所属し2カ年研修を積んだ。その中で、特に印象的なものは、ワークショップである。参加者が創造的で、生き生きとしたアイデアを生み出していた。グループでの話し合いや作業を通して、自由に意見を出し合うことで、お互いの理解を深め、認め合うことができた。

この経験を生かし、地域における自主的なまちづくり活動のサポートをしたい。

2 文化のまちづくり

私は、生涯学習センター「コスモス」を年間通して利用している。当センターには、文化的遺産、風土を生かしながら、優れた芸術文化を身近で鑑賞できるようにし、地域文化を育てる拠点として、その機能を発揮してもらいたい。そのために、次の点をお願いしたい。

併設されている史料館や図書館の施設の持つ機能を十分発揮させる。

市民が、積極的に参画できる取り組みをさらに工夫する。

子どもたちの文化・芸術活動への積極的参加促進と意識を高揚させる。

文化・芸術活動を通して、地域コミュニティの活性化を図る。

「しみじみの家」や「民家園」など、周辺の施設との連携を考慮した工夫を凝らせば、もっと大勢の市民が散策に訪れる。

施設・設備の使用率を向上させるために、利用料金等の見直しをする。

そこを訪れると新鮮な情報や発見があったり、心の安らぎを覚えたり、何かを学んだりする施設であってほしい。

3 郷土を愛する

自分の住む町が一番だと、郷土に対して強い愛着心や誇りをもてる人々を一人でも増やすことが重要である。老後も住み続けたいと願う町とは、どのようなものか。それは、生活するのに便利なおえ、治安も良く、仲の良い近所付き合いや人情のぬくもりが感じられる場所、すなわち「安全・安心」な場所だと思う。

「文化」だけの視点で町づくりを見るのではなく、「安全」「観光」「福祉」「教育」などの施策と連動させながら進めることをお願いしたい。郷土に執着心を持ち、何十年も先を見て取り組めば、より独創的なビジョンも生まれてくると思う。高くスローガンを掲げ、姿勢を見せることで市民の意識に変化が生まれるはずだ。

まるごと文化ホールプロジェクトチームの目的は、小美玉市にある3館をこれから将来にわたって、負の遺産にならないようにどのように使っていくかと、当初私は思っていました。しかし、何回もの会議（研修？）や委員のみなさんの意見を伺っているうちに、これは少し考え違いをしていたと思いました。本当は、この小美玉を文化の街にするために、当市にある三つの文化ホールは何ができるのか、だったんだと気づいたんです。プロジェクトチームでは、様々な事例や委員のみなさんの意見等を聞き、それぞれの素晴らしい考え方に一々納得しました。でも、そのためにはこうするんだ、という特效薬はなかなかありません。たくさんの意見や考え方が出ましたので、それに基づいて常に何かしら行なっていく、停滞しないように動いていく、ということが重要かと思っています。

さてここで、私個人的な考えを一つだけ書きます。シンポジウムの時に、市長が言った「文化は芸術文化だけでなく、食文化や農文化などもある」という言葉が、やけに心に残っているんです。文化ホールで、異文化交流のような催しができるとう面白いかもしれませんね。

内田 保

これからの文化施設への想い。

「文化」。若者にとってピンとくる言葉ではありません。自分の生活とは異質な何か特別なもののように感じます。思い浮かぶのは古墳や地元の行事といったところでしょう。私は、文化とは「その時代にいた人たちの活動」だと思っています。そしてふと思いました。「自分たちの生きた時代はどんな文化だったと言われるのかな。」

私は、未来の人たちに「小美玉市の文化施設は若者がたくさんいて、地域リーダーの輩出の場だった」と言われたいと思っています。県内のどこの活動団体のリーダーも活動の原点が小美玉の文化施設だったら、なんて誇らしいことでしょうか。

それを実現させるには何が必要なのか考えてみました。どの世代の人も入りやすい“きっかけの場”活動によって“成長できる場”成長が個人の味になる“熟成の場”の3点です。特に大切だと思っているのが、若者が入りやすい“きっかけ”を作ることです。若者が集まることで施設は元気になり、元気なところには人が自然に集まるからです。

現在みの～れではディベロップスクール(通称「DS」という若者が企画の実行・運営をする若手リーダーを育成するチームがあります。そのDSに携わって感じたことがあります。それは若者が文化施設での活動にあまり興味を示さないということです。文化施設は真面目で特別な場所というイメージが強くて、若者が行く場所ではないと考えてしまっているのでしょうか。過去の私もそうでした。しかし、DSの企画の参加者に感想を聞くと文化施設の特別な場所というイメージが変わったという意見をいただいています。参加してみれば意識が変わるんだなと実感しています。

これからの文化施設では若者を集めるために堅苦しくない“自由な環境づくり”が一つのキーワードになる気がしています。自由な環境が新しいアイデアを生みます。アイデアが生まれればチャレンジが生まれ、チャレンジが元気を生みます。いかに公的施設である文化施設で自由な環境が生み出せるのか。これは、文化施設そのものの可能性の追求・挑戦です。さまざまな決まりや壁があるとは思いますが、文化施設の可能性を最大限に発揮させるために何が必要なのかをみんなで考えることが大事なのではないかと思います。

若者の視点で、こんな施設だといいな、こうすることが必要だなと考えたことを書かせていただきました。これからの文化施設をどう考えていくのか、何を重要視していくのかはこれからもいつも心の片隅に置きながらこれからも活動を続けていきたいと思っています。

最後になりましたが、仕事の都合で会議には初回のみ参加となってしまったことに、プロジェクトチームのみなさま、関係者のみなさまにはご迷惑をおかけいたしました。それにも関わらず今回の投稿の機会を与您いただきましてただ感謝しかありません。本当にありがとうございました。

樺木 元成

思いは繋がる...のね。でも

生涯学習センターコスモスを活性化させる「コスモスプロジェクト」が立ち上がってから今年で3年目。中村補佐の「やっちゃいましょう！」という勢いある言葉に押され、昨年から予算ゼロの中で企画を立ち上げました。不定期でいささか無計画。素人臭くはあるけれど、数回のイベントを実施し、客数は回を重ねるごとに増えていっているというのが今の現状です。

「思い」を「カタチ」にしたとき、独りでよがることなく、スタッフ同士が支えあい、来場してくださったお客様が「感動」を持ち帰ってくれる様子は、時間やガソリン代をかけながらも「言ってよかった。やってよかった」と、他には換え難い思いを得ることができます。(これはみの~れとアピオスという先輩がいたからできたことです！)

しかし、出産に例えるならば「やっちゃった(企画)」「産んじやった(実施)」...そのあと「どう育てたらいいの?(今後)」という壁にぶち当たってしまいました。(みの~れとアピオスは上手に育てて成長しているのに...)

私は何処に行きたくて、こんなに走り回っているのだろう？

そんな思いを漠然と抱き始めた頃、この座談会に参加することになりました。第1回目の**星空の下**での座談会では、お互いがよく見えないというのが利点になり、顔を伺うことなく、素直に自分のこの“迷い”を言葉にすることができました。その言葉をみなさんが温かく受け止めてくれてとても安心しました。第2回目の座談会では、「**文化をビジネスとして活かしていく**」という高田氏の言葉に衝撃を受けました。思っていたも、「清く正しい文化」の前では口に出せなかった言葉だからです。第3回目の熊倉氏の、限られた時間の中、自分の文化に対する思いなどを惜しみなく語る勢いに圧倒され、開催中は言葉が出せませんでした。「**無償であることの公平さ**」「**パットナムの“結束型”と“橋渡し型”**」には深く共感しました。4回目の**ツリー構造化**は、目先で走り回り、全体を考えていないと自己批判気味だった私が、実は「“まち”を育てるために走り回っているかも？」という「**繋がり**」が見え、励みになりました。5回目の群馬交響楽団との座談会。戦後間もなくプロ化し、**社会活動**にも積極的に取り組んできたことを初めて知り、高崎市の子どもたちに嫉妬しました(笑)。

今なお「特別な領域の人たちのもの」と捉えられがちな“文化”は、あらゆる人間の“精神世界”という内側の土壌を耕す上で、とても大切なものだと思います。

文化は目には見えない。でも人間として欠かすことのできない文化が、こうしてもっともっと身近に感じられる「場」を増やし、文化を遠い存在としてしまっている方々に身近に感じてもらえるような、“橋渡し”ができれば、ここに今在る自分に自信が持てる気がします。

お母さんの生き生きした姿が何よりの子育て(大切な次世代へのバトン)

文化は案外、こんな部分から成り立っているのではないかと考えています。そんな私に「それでいいんだよ」って答案用紙をハナマルで返してもらえたような、そんな座談会でした。

小松崎 由美子

【小美玉市の3館は】

合併して3館の文化ホールを持つ市となった今、
1つの館でおきた文化の感動を他の2館に波及する。
文化の渦をまわすのである。

物質的には、キュートなデザインバスが駅・空港・3館をまわって
人を繋いでいく。

【まちづくり】

どこの市も風景が同じになるような大型チェーン店の乱立がない小美玉市 美しい空を
守りたい

子どもたちに感動を植えつけた教育をめざしたい

【個人の人生】

3館に関わることで1人1人の人生において登場人物がたくさん増える。
どんな出逢いがあるか、どういう展開になるか面白いし、楽しい人生になっていく。
人生はこれからだ！そんな気持ちにさせてくれる場所になりますように。

野手利江

小美玉まるごと文化ホール構想にかかわって 夢をかなえるステージ作り

「美野里町にホールを作ります。委員を募集します。意見を書いて応募して下さい」との呼び掛けに、夢中で意見を書き、委員になった。出来上がるまでの山あり谷ありの6年半と、出来上がっての3年半。美野里町の「みの～れ」は実に生き生き輝いていた気がした。

その後現れた合併という嵐の中での、5年半。支える側の文化行政の当初は実に危ういものであった。しかし市民・住民の文化に対する思いは真に揺るぎないものであることが判った。積み重ねた努力、実績、足跡、そしてこれからへの期待、合併をばねに大きく膨らませようとしている。

奇しくも合併し、市内に3館を有するという恵まれすぎた環境に置かれてしまった小美玉市。故に悩み、模索し、今一つにつながることを夢見るまでになった。まずは交流すること、何度も何度も顔を合わせ、意見を闘わせ、ともに認めあうまでに進化を遂げた。今や3館にとどまらず、4館、5館を目指し、市内どこもがステージ、その中で何を創り、どう演じ、どのように繋げていくのか、議論が実現化を始めている。何よりそのプロセスが大切と思う。そして関わった人々がミッション、目標を持ち、絆を広げ、楽しく前進していることが実感できる。

さて課題は世代をつなぐこと。これも少しずつではあるが広がっている。あの時幼児だった子らが、思春期を迎え育っていく姿を見続けられたことも頼もしい。これから先の10年20年後がますます楽しくなっていくだろう。そんな時も山や谷、風がきっとあるだろう。私はその時も見守り役をぜひしたい。

しかし実際考えてみれば、いざ市内全域にこの思いを広めようというのは実に大それた大事(おおごと)。アメンバーのごとくじわじわ実行するのみ。それもまた楽しいかなあ。

合併してまだ5年。混ざり合うには当分の時を要するだろうが、今回のこのようなたわごとがきっと実現する時が来るはず。

私の眼の黒いうちに「あの時は」と語れる日を楽しみに、もう少し頑張ろうかねえ。

福島ヤヨヒ

みの～れ、アピオス、コスモス それぞれの取り組みと今後の課題

1. はじめに

今回のプロジェクトに参加をさせていただき、初めて文化について考える機会を得た。色々な分野のゲストの話やメンバーの意見を聞くことができ、貴重な経験となった。蓮見先生を始め、ゲスト、スタッフの皆さまに感謝したい。ここで得た情報や知識をどう消化して、これから自らの糧にしてゆくのかを考えている。レポートを作成するに当たり、3館のこれまでの取り組みを改めて検証し、課題や展望について考えてみた。

2. みの～れの取り組みと課題

来年に10周年を迎える今も、その建設計画に始まる住民主導の姿勢は一貫し、設立当初の住民の熱い思いはまだまだ衰えず進化を続けている。地域創造大賞の受賞にみられる通り、その活動は、全国的にも高い評価を受けており、小美玉市文化創造の拠点となっている。住民主体の企画実行委員会が統括した企画運営を行いながら、みの～れ支援隊と各種実行委員会の住民スタッフが直接の支援活動を行い運営の基礎を支えている。また、演劇ファミリーMyuやジョリフォレなど演劇・音楽の住民サークルが育ち、数々のワークショップや芸術展、アクティビティーなどで、子どもから年配層まで幅広い年代の市民を対象にした身近に芸術・文化に接する企画を続けて、開館以来、地域に文化の種をまき続けている。

9年間の成果として市民への文化振興への貢献は、市民の多くが認めるところである。上記の企画・運営の組織体系についても盤石に思える。強いて言えば、今後利用層のさらなる拡大ができるのか（公共ホールはどれだけ多くの住民に利用されるかが最重要）と職員や住民スタッフのモチベーションの維持と世代交代がうまく進むかが課題か。公演・イベントでは、いつもよく見た顔ばかりとなっているかも？（喫茶店のつぶれるパターン）。

3. アピオスの取り組みと課題

かつては大型ホールを使った歌謡ショーや演劇などの興業型イベントが主体で、施設イメージ、運営方法は、みの～れのそれとはまったく対照的であった。合併後、みの～れからの職員移動を機に活性化委員会が立ち上がり、住民参加型のイベントが数々企画され成功を収めている。なりきり、おなじバンド、小劇場などの大型ホールを有する施設の特徴を生かした企画はいずれも盛況。また、アピオスばるばるも発足し順調に活動をしている。閑散としたロビーや暗い受付カウンター、トイレなどが施設改修により明るいイメージとなり、展示スペースも設けられ、公演時だけでなく、人が集う空間に生まれ変わった。

みの～れでの住民参画の手法を生かした活性化の仕掛けは功を奏し、さらにホールの使いかたでは、みの～れとの住み分けの道筋を立てた。しかし一方で、育成・住民参加型の企画が乏しく、特に一般市民（特に地元の旧小川町住民）に対して、文化の普及・振興の拠点となっているのは疑問（住民に利用され愛されるホールでなければならない）30周年イベントで、どれだけ多くの新・住民スタッフを発掘し、いかに引き込めるのかが間近な課題。

4. コスモスの取り組みと課題

図書館、史料館、公民館、ホールなども含めた小美玉市生涯学習の拠点となる複合施設で、他の2館とは市行政の所管も含めて異なる立場にある。かつて玉里村時代は、唯一の文化施設として、地域の文化・芸術の拠点として住民に愛され、その存在意義が明確であった。しかし、合併後、市内に3館のホールが存在するようになってからは、市の辺境に位置する立地条件もあってか、市内他2館と比較するとやや活動が沈滞し、存在感が薄くなった感が否めない。数年前から活性化を目的とする、コスモスプロジェクトが立ち上がりC.C.C.（コスモス・キャンパス・コンサート）やコスモスカフェWin-Win、サークル交流会などのイベントが開催されて活気を見せ始めている。

これからのコスモス活性化のキーワードは「コスモス アイデンティティーの確立」と考える。かつてコスモスは玉里村文化・教育の中心であった。様々な分野の音楽・演劇が催され、多くの住民サークルが活動をし、子どもたちが育っていった歴史がある。これから支えて行く人材は其中に多く存在するはずだ。ただ、玉里地区住民は、行政に対しての住民参画の意識が根差していないために、それを引き出しにくくなってくるような気がする。そこへのアプローチもコスモスプロジェクトの重要な役割か。また、アピオスがみの～れの手法を取り入れて成功したことに習うことも必要。閑散としたロビーを陽だまり横丁のような展示を目的とした活用をする。チラシだらけの受付周りを整理し、明るいイメージを作り出すことはできないのか？個人的には周辺環境と付帯施設を生かした企画（しみじみの家の宿泊）特に小学生向けの自然体験を目的とした事業を展開し、コスモスになじみの薄い、美野里地区、小川地区の子どもたちを引き寄せる手段としたい。行政側の人事、予算面でのテコ入れを期待する。

5. 結び

小美玉市の3つのホールを「図らずも生まれた3兄弟」と蓮見先生は喩えた。子育てで重要なことは、兄弟と比較をしないことなのよとTVで尾木ママが言っていた。3館には3館それぞれの成り立ちと歴史がある。それを個性と言うならば、まずはそれぞれの個性を尊重しながら、最大限の愛情を持って育ててみよう。それぞれの長所を伸ばし、課題があれば兄弟の例に習う。兄弟は互いに切磋琢磨しながら、そして地域の人たちに支えられながら成長してゆく。

「3館の住み分け」は、今回のプロジェクトの一つの課題であった。それぞれの子どもの個性をほめて伸ばしてゆくことで違った顔つきになってくるのではないかと。自ずと住み分けは出来るのかも知れない。

福田 智彦

まるごと文化ホール計画策定プロジェクトに関わって思うこと

昨年から“チームまるごと”に参加しております。毎回、今度は中本主幹は何をさせるの？とドキドキし、胃が痛くなることも少なくなく、緊張ばかりしておりました。

正直な話、自分の知識不足を感じながら・・・そんな私が、小美玉市の将来の文化ホールのあり方なんてどうすんのよ！わかんないよ！と、心で思いつつの参加です。なんか意味もなく否定的になることもありました。

成功者の体験談・・・私たちにいろんなことを投げかけたり、計画作りのためのキーワード探し、それはそれなりにわかるけど・・・それだからどうなの？今、成功しているから言えるんだよね。そんなふうを考える自分がその場にはいけないかも。葛藤の時間も

でも、集まった皆さんの考え方、文化ホールへの思い・・・心に伝わりました。皆さん、疲れていても（私も疲れていました）、夜、集まり、時間を忘れディスカッションをしている、こんな人たちがいるからこそ、小美玉市の文化は活性化してきたんだなあ！とつくづく思いました。

たくさんのキーワード探し、手段、戦略、理念を考えながら、やはり、いつも思うことは「人づくり」。将来の文化ホール計画に必要なものは、なんだかんだいっても、将来を担うための「人づくり」が、一番大事だと私は思います。

今、元気に頑張っている方たちのような方を、たくさん育てていく「人づくり」これが必要だと思います。

小美玉市には、“チームまるごと”以外にも、3館に関わって頑張っているたくさんの人たちがいます。もっともっとたくさんの仲間が集まってくると確信します。

そのためには・・・今のうちに中本さん！！はじめ、3館の職員の皆さん！仕掛けていて下さい。いろんなことを仕掛けてきた、皆さんならそれができるはず。

最後の最後に「レポート」提出があるなんて・・・やっぱり、すごい！

今の私には、いろんなことがありすぎて、すみません。こんなことしか書けません。

2 ヶ年に渡り「小美玉市まるごと文化ホール計画」策定プロジェクトチームに携わり感じたことをまとめてみました。

計画策定に向けてのワークショップで思ったこと感じたことが3つあります。

1つは、自らが積極的に参加するという意識をもつことにより、「やってみよう」と思う意欲が高まり、自分なりに考えようとする姿勢が身につくこと。

2つは、この体験（ワークショップ）は、講義などの伝達スタイルではないので聞いている立場の「お客さん」ではいられないこと、様々な意見交換をするには、知恵を出すため頭が動き、手振り身振りではないが体も動くこと、コミュニケーションにより「人と人」の関係（交流）の中から、和気あいあいとした、良い雰囲気形成され自然と笑いも生じること。

3つは、グループという集団でルール（時間・役割）を守りながら、自分の考えやアイデアをできるだけたくさん出し、整理してまとめ発表することで、全体で（プロジェクトチーム）共有することができること。

気付いたことは、自らが参加・体験して共同で学びあったり創り出したりするスタイルとして、ワークショップは「参加」「体験」「グループ」で学習することに意義があるということです。

学習したワークショップの中で、印象に残る（特に頭を動かした）ことが3つあります。

1つは、理想が実現した未来の日記を書く「未来日記を書きましょう」。私は5つほど日記に書きました。グループの共通点として整理すると「みんなで文化を高める気持ちを持っているまち・文化活動によって、市民がまちへの愛情を深めている」という未来日記としました。

2つは、私たちが考える「魅力ある文化のまち」になるための10か条をつくろう。計画に記述したいと思うことなどを個々に書き出し条立てする。グループで立てた内容は、8つの条項としました。

3つは、計画書の柱と戦略を考えよう。これまでのワークショップ、先進事例の講義などで得られたキーワードを出し、計画書の構造にする。グループで出した構造は、文化ホールは「楽しむ・つながり・らしさ・慈しむ」を理念とし、目的は「人づくり」と「まちづくり」としました。

印象に残る3つですが、毎回行うワークショップが非常に刺激的であり、3館で活躍するプロジェクトチームのメンバーと、とても良い交流「人とのかわり」ができたと感じています。また、人それぞれ考え方が違う中で、ひとつのこと（答えを出す）を協力し合いながらやってきたこと（ワークショップ）で信頼感も生まれたと感じています。

文化の楽しさが実感できる事業を発信し、展開していくことが「魅力ある文化のまちづくり」につながると考えます。そのためには、自主事業活動をする中で、新たな事業を企画立案（各委員会）し、出来ることから1歩1歩「あきらめずに」進んでいくことが必要ではないでしょうか。

最後に、公共ホール3館を有することは、財政的負担が大きいですが、魅力的な文化のまちづくりができる条件が整っているという強みがある。まるごと文化ホールを中心とした活動により、まちの文化が守り育てられ、住んでいる人の心にまちへの愛情や誇りを高められると考えます。

（PS：ワークショップで気付いたこと・学習したことを書きたかったので長くなりました）

アピオス 田村昇一

まるごと文化ホール計画策定プロジェクトチーム会議に参加して

「また10時になってしまった。」その後も話したりしないのか、立ち話が続く。毎回の会議がいつもこのような感じで終わっていた。時間がいくらあっても足りないくらい。

計画策定に係わった人たちに文化やホールについての話をしてもらおうと、きっと話がつきないほどの想いがあったり、活動的であったりというのが感じることができる。文化ホールに携わっている人たちは、自分で自分のやりたいことをしているだけでなく、いやそれ以上に文化ホールを盛り上げようとする、ものすごいパワーが目の当たりにすることができた。

毎回の会議の中で、他の文化ホールや文化活動の話や、多彩なゲストによるお話などを聴いた中で、自分の活動はまりにも小さく、参考とすることまでもいっていないような感じがした。

私の中で文化芸術と聞くと、どうも敷居が高いようなイメージがあったが、文化ホールでの仕事に携わるようになり、活動をしている人たちと触れ合うようになり、そのイメージが払拭された。

確かに芸術性の高い本物を観ることも大切であるが、市内の身近な文化ホールは市民のためのものであり、市民の活動の拠点として、すでに多くの市民が活動していることをあらためて認識することができた。

文化ホール3館、茨城空港も賑わいを見せている。それにも増して、空の駅にはステージも出来る予定で、市内でお客様の取り合いになってしまうのではとの心配も出てきたが、文化活動だけを取ってみても、多種多様、趣味趣向も違うので、それほど心配することもないのではとの感もでてきた。

文化ホールをどのように維持していくかで見えてきたものは、これからも文化ホールを担っていくのは、市民であるということ。そして市民との協同であり、共同である。それを続けていくことができれば、文化ホールの衰退はない。世代が変わればやることも変わり、マンネリもない。古くから携わっている人はその変遷を暖かく見守っていくことも大切である。文化ホールはみんなのものという意識で、遠い存在ではなく、足の運びやすい気軽なものであってほしい。

みなさんの心の中で、少しでも文化ホールを見てみたいという心が芽生えたら、一度来てみませんか。あなたの想うことは何もないかもしれませんが。もしかすると想像以上かもしれません。新しい自分を見つけることができるかもしれません。(ちょっと大げさかも)でも人生が変わることってあるかもよ。

この策定委員会に参加して私の好きな言葉を思い出しました。高校生時代に出会った言葉で、それは「私は誰にもできない人生を演じたい。」

コスモス 中村 哲也

今回、蓮見先生を中心に、プロジェクトメンバーの皆さんとともに「まるごと文化ホール計画」を作成していくという貴重な体験をさせていただきありがとうございました。

蓮見先生の講義を聞いたり、時には講師の先生を招いて経験談や事例のお話を伺ったり、メンバーの皆さんとワークショップ等をやりながら計画作りをしてきましたが、自分としては毎回は新鮮で大変勉強になりました。

平成18年に旧小川町・旧美野里町・旧玉里村が合併して小美玉市が誕生し、6年目になります。

合併当初は、旧町村の行政サービスの違いなどもあり住民の方々も、負の意識が強かったように感じます。

それまでの歴史や環境などの違いもあり仕方がないことなのかも知れませんが。

しかし、時間とともにお互いを知ることにより、だんだんと前向きに考える人が増えてきたように思います。

市内には3箇所の文化ホールがあり、建設された経緯も違い、そこに关わる人たちの考え方や思いも当然違います。

私は、昨年4月から四季文化館(みの~れ)に配属になりました。

住民主導で建設され、運営されていることは聞いていましたが内容的なところはあまり知りませんでした。

みの~れに行って、子供たちからお年寄りまで年齢に関わらず人の出入りが多いことと、みんながすごく元気で、誰に対しても自然に笑顔であいさつしていることに驚かされました。

自分の子供の頃は、それが当たり前で、いまは地域のコミュニティが少なくなってきたように思います。

今回、いろいろな方のお話を聞いて、「住民主役・行政支援」という文化が、地域の活性化、理想的なまちづくりにつながっていくと改めて感じました。

「まちづくり」には、まずそこに住む人づくりをすることが大事であり、人づくりのための一つの手段とし文化ホールが活用されることが望ましいと思います。

そのために少しでも役に立てればと思っています。

みの~れ 長谷川正幸

「小美玉市まるごと文化ホールの座談会」で常にしたのは、みんな自分の住むまちに愛着があって、そのまちが元気になることへの想いがあふれていることです。

文化は生活には直接必要無いのかもしれませんが、しかし、文化の持つ力でたくさんの人たちの心をつなぎ、心が豊かになって、まちづくりにつながっていくことによって、自分の住むまちに活気が生まれ、愛着が湧き、親から子へと受け継がれていく手段には必要不可欠です。

これまで小川文化センターアピオスでは、東京から一流の方を呼んで、住民への鑑賞の機会を提供してきましたが、平成20年度の国民文化祭をきっかけとして、住民参画を取り入れて改革をしてきました。

「小美玉発！スター なりきり歌謡ショー」もその1つで、ステージに立って歌うのは一般の方で、あとはプロがバックアップして本格的なステージをつくる企画です。自分を応援する観客を30人連れて来るのが参加条件の1つになっており、応援合戦も見ものですが、一般の方が出演する公演にもかかわらず、チケットが完売してしまうほどの人気です。

また、「この企画を通してここに住む人たちをつなげたい。このショーを一緒につくっていく」という主旨をご理解いただいた地元の企業・団体に協賛をいただいております。

この企画によって、アピオスに来たことの無い方が、自分の知り合いを応援するのに訪れ、また公演を観た人の中には、次は私もこのステージに出ようと思い、また応援する人たちを連れて来る。そして協賛企業・団体を紹介することによって、地元の企業・団体を理解することにもつながっていく。

今回の座談会で、蓮見先生が言われた“きれいな水の中では、限られた生物しか住めない。” “超一流を目指すなら、超一流を連れてくれば良い。” “「小美玉らしさ」=真似の出来ない多様性のある、そしてクオリティーの高いものを目指して、3館それぞれの個性を出していかなければならない”と言われたのが印象に残り、まさにこういうことなのかなと思いました。

また、生活文化課では、芸術文化にふれたことのない子どもたちに、芸術文化に触れる機会を与えていく「学校アクティビティ事業」を現在行っておりますが、今回の座談会で、群馬交響楽団の戦後からの活動の歴史の話をお聞きして、結果が出るまで時間はかかりますが、「学校アクティビティ事業」が次の世代を育て、良い人材が育てば豊かな地域(まち)へとつながっていく、そんな仕事をしているのだと実感し、改めて自分たちがやっていることが、必要なものなのだとは再認識しました。

地方は都会とは違って、地に根をはって花を咲かせることが大切で、地にしっかりと根をはるまでは時間がかかりますが、しっかりと根をはれば強くもなれる。小美玉市にもしっかりと芸術文化の根がはれるようにしていかなければならないと感じました。

我々職員が、そういったことを理解した上で事業を進め、またそれを少しでも多くの住民の方々に知っていただきつなげていく、そして小美玉市が元気なまちになるようにこれからも努力していきたいです。

アピオス 林 美 佐

3つの宝箱

合併し、3つの文化施設をもつ小美玉市。この文化施設をまちづくり・人づくり・交流の道具として、いかに有効に活用していくかは大きなテーマです。

3つの施設にはそれぞれの顔があります。

1,200席のキャパシティがあり、多人数の催しが開催できる小川文化センターアピオス。住民組織が活発に活動し、事業の企画決定や実施に積極的に関わっている四季文化館(みの〜れ)。図書館・公民館・史料館・ホールの複合施設で、市内の公民館(類似施設を含む)を統括し生涯学習の拠点となっている生涯学習センターコスモス。

これらの施設は確かに箱ですが、市民や地域の皆さんが愛着を感じ誇りに思える施設になれば、心のよりどころ・小美玉市のシンボルになります。

ここに人が集い交流することで、生きがいや喜びが生まれ、明日を頑張るモチベーションとなり、まちが明るく元気になります。

この箱の使い方によっては、ただの箱のままでもあるし、あるいは魔法の宝箱にも変わるのです。

ただの箱をどうやって魔法の宝箱に変えていくのか。それには、ここに関わる住民の皆さんや職員の、様々なアイデアや仕掛けが必要不可欠です。

どうしても目先の事業を“どうやって無事に開催するか”ということだけを考えがちですが、“この事業をどのようにしてまちづくりにつなげていくか・どんな楽しい仕掛けを作ろうか”という意識で考えていけば、私たちの手で魔法の宝箱に変えることができます。

多くの人達がそれぞれの目的で宝箱に集まり、楽しみ交流し沢山の出会いが生まれれば施設もまちも元気になります。

小美玉市のあちこちで身近に芸術文化に触れることができ、10年後も20年後も、3つの宝箱(文化施設)がまちづくりの拠点として輝き続け、明るく元気な笑顔で満ち溢れていたなら、この「小美玉市まるごと文化ホール」プロジェクトは大成功だと思います。

これからも、何らかのかたちでこの“魔法の宝箱”にかかわっていきたいと思います。

コスモス 関 秀 樹

私の父は、兄と私をプロ野球選手にするのが1番の夢でした。
2番目の夢は、自分の夢だった小学校の先生。
この夢は兄が叶えました。

私たち兄弟が少年野球チーム「江戸スワローズ」に所属していた頃、
父は監督を務めていました。
その父を中心に、コーチ・保護者で作ったソフトボールチームが
「W(ダブル)オーバース」。
みんなお腹が出ていて、
“ウェイトオーバーのおじさんたちの集まりだったから”
というのがチーム名の由来です。

あれからかれこれ25年は経ちますが、
当時の少年野球の仲間たちが父たちのチームに入り、
2世代で活動しています。
少年野球で鍛えられた仲間が揃い、
学生時代にソフトボールのピッチャーを経験してきている仲間もいて、
なかなか強いチームなのです。
教え子たちが活躍してWオーバースを強くする。
父の3番目の夢でした。
父が満足そうですから、叶えられているのでしょう。

2世代揃って、という話。
次男坊の私が地元に残ろうと思った最も大きな理由は、
このWオーバースの存在だったのです。
地元で自分の居場所がある。
仲間たちが揃っていて、それを望む親たちがいる。

文化も同じだと思うのです。
みの～れを誕生させようとした住民の人たちは、
“みの～れは子どもたちの文化活動の受け皿になってほしい”
という想いを持っていました。
美野里中の文化部(団体)は演劇部と吹奏楽部。
ここのOBたちは、
水戸や土浦・つくばまで行かないと活動の受け皿がないことから
ほとんどが活動を辞めてしまっていました。
こんな背景から、
住民劇団・住民楽団はみの～れ誕生と同時に課せられた使命でした。

大人になっても自分が本気になって活動できる場所がある。
それが、手塩にかけてまちぐるみで誇りを持って育ててきた子どもたちが
この地に住みつ়理由の一つになるのでは、と、
私の実体験から強く思うのです。

文化ホールは人が成長する場であり、
人が想いを寄せる場でもあり、
生まれ育った土地に誇りを持つことにつながる。
そして手塩にかけて育てた子たちがこの地を支えて、日本を支えていく。
そんな素敵なサイクルが、とって実感できている今日この頃。
この仕事に携われていることに、あらためて感謝しています。

「熱意×想＝人の心を動かす」

このプロジェクトチームの会議を通して、プロジェクトチームメンバーやゲストの話を聞き、共通している部分を自分なりに考えてみました。

「この地域を良くしたい」「このイベントを成功させたい」という【熱意と想】です。

【熱意と想】を持っている人の話は、聞き手の心を揺り動かします。そして熱意と想いを波及させます。それが「ビッグウェーブ」になって、地域を輝かせたり、イベントを成功に導いたりするのだと感じました。

四季文化館(みの～れ)には、多くの住民が参画しています。なぜこんなに多くの住民が、みの～れに足しげく来ていただけるか？それは館長や職員に【熱意と想】があり、「館長(職員)の為だったら一肌脱いでやろう」と感じているからだと思います。逆に「住民が頑張っているんだったら、給料をもらっている職員はもっと頑張らないといけない」と必然的な発想が出てきませんか？その住民と職員の信頼関係で、みの～れは様々な山あり谷ありを乗り越えられたのだと考えます。

今よりも「ちょっと」気遣いをしてみてください。

今よりも「ちょっと」丁寧な対応をしてみてください。

今よりも「ちょっと」様々なことに興味を抱いてみてください。

今よりも「ちょっと」が良いです。その「ちょっと」の積み重ねをすることによって、【熱意と想】に変わり、【人の心を動かし】、10年後の小美玉市が今よりさらに輝いていることを祈念します。

みの～れ 沼田 譲治

これまでの、小美玉市まるごと文化ホール計画で行なった様々なディスカッション・シンポジウム・座談会で再発見したことがいくつもある。

それは

プロジェクトメンバーそれぞれが自分の関わっている事業や取り組みがどんなに素晴らしいことかという自信を持っている、そして、さらに良くするためには何がいいのか悩んでいる。

それはまるで館長の様に考えている。

プロジェクトメンバーそれぞれが、自分の基盤とする「ホール」の現状を変えるには、より活性化するにはということを感じているのだなと感じた。

「ホール=人」

それは、3館に関わる人それぞれが、ホールということ。

つまり、小美玉市に3館あるのはホールではなく、3館それぞれに関わる特色のある「人材」という捉え方をすること。

その3館にある人材が交流する。

みの～れで始まった「物語」の第2章がコスモスでスタートする。

その物語を見た人がアピオスで「物語」をスタートする

それは、住民が一人の作家のように

「物語」を書き終えた作家は、他の作家の「物語」を読む「読み手」であり、自分の「物語」を伝える「伝え手」になっていく。

そんな「物語」を発行する行政

それは、出版社のように

作家である住民にネタをという「交流」する場を作り、「物語」を製本するため「社会的役割」という校正をする。

けれど、あくまで「出版社」

でも、お金という「社会資本」が欲しい「出版社」

だからこそ、「裏方」

だからこそ、「支援」

そんな物語を増やしていくこと

そんな物語を多く出版していくこと

10年後、20年後そんな「物語」で溢れている小美玉市であって欲しい。

みの～れ 清水弘司